２１世紀の日本のかたち（１１３）

２０１９年・日本の動度と動的平衡

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

平成最後となる今年、平成31年（己亥）、2019年の正月もまた、日本の内外に戦争や災害を含めて、政治・経済・社会に渦巻きのような動き、激動が報告されています。国のかたち、社会のかたち、これをどのように捉え、如何に対処すべきかについては、平成を越えて日本の大問題に違いありません。

当面する日本の課題

・世界の動き・激動する国際情勢の中での舵取り
・災害問題
・急速に進む少子高齢化問題　など

これらの諸課題は日本列島に営まれてきた人間居住の基底にある伝統、文化的基盤を確認しつつ、動的平衡状態を想定して国として策を立てることだと考えます。

２０１９年１月 世界の動き

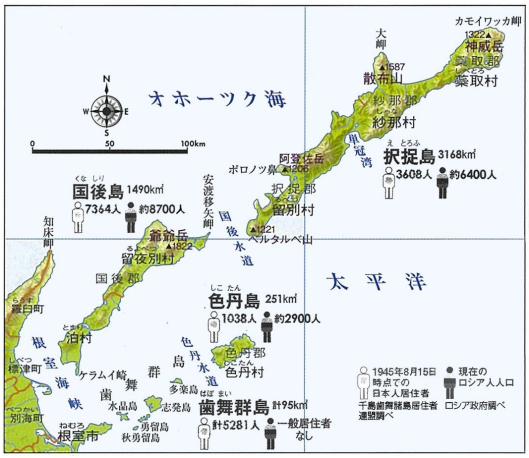
第四次産業革命ともいわれる技術革新の中、各段の情報交通の発達に支えられる動度（モビリティ）の大きいグローバル化の波の中で、ヨーロッパやアメリカなどでは自国第一主義を掲げる反グローバル化の動きが活発化しており、またＥＵも英国の離脱など、新しい局面を迎えております。英国下院はメイ首相のＥＵ離脱案（分裂の修復と円滑な離脱をめざした）を否決、離脱タイムリミットは今年３月29日。合意なき離脱に向かうのか、３年前の国民投票、賛成は51.9%。

米中通商紛争も今年に持ち越しです。

南北朝鮮和解の動きの中、北朝鮮・金正恩委員長が１月８日に訪中し、中国・習近平国家主席と４回目の会談を行いました。金氏とアメリカ・トランプ大統領との二度目の会談は、２月に決まったと報じられております。

日本とロシアの平和条約交渉が、モスクワで日露外相会談（１月14日）、安倍首相・プーチン大統領首脳会談が１月22日に行われましたが、日露平和条約、北方四島問題は進展せずの状態です。

図１　北方四島の面積と人口



注：成美堂出版地図に面積と人口を戸沼加筆

中国はアジアを越えて世界に存在感を増しておりますが、日中平和友好40年の経過とこのベースの上に、これからの両国の文化、経済などの友好、交流の進展が期待されます。北東アジア、アジア諸国の人的、経済的動度は、国民国家の枠組みを越えた、21世紀のアジア的人間居住の構築に長期的には向かっているようにも感じます。

災害問題

昨年は災害の多い年でした。西日本豪雨（７月）、北海道東部地震（９月）と自然災害に見舞われました。これらの災害に遭って、地域の日常生活の平衡状態は大きく破壊され、この再建、回復は今も懸命に続けられております。

日本列島を人間居住とする国にあって、自然災害は宿命的といえます。平成年間において、阪神・淡路大震災（1995（平成7）年1月17日、死者6,434人）は、その復興過程を含め、記憶に生々しく残っております。東日本大震災（2011（平成23）年3月11日、死者19,667人）は、原発事故を含む大災害であり、未だに復旧、復興の途上にあります。

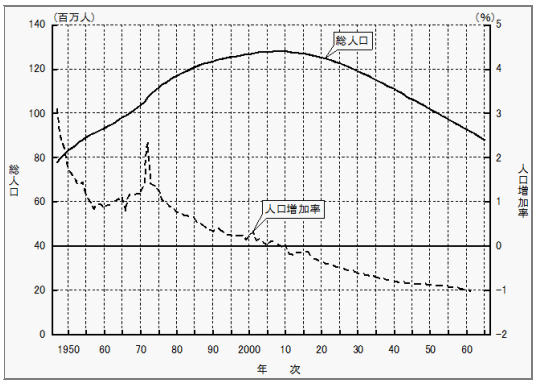
近未来、首都直下、南海トラフ地震が予測されており、大都市東京、東海道メガロポリスの日本列島における人間居住の有り様が、根本から問われております。東京一極集中の首都機能、本社機能移転、分散は待ったなしではないのか。

急速に進む少子高齢化問題―日本の国土において営まれる人間居住の人口動度と動的平衡について

日本の人口動態を人口動度（変動のスピード）でみると、2004年12月をピーク（12,784万人）に、人口増から人口減に、日本の歴史始まって以来、少子高齢化のプロフィルをみせながら、急激な減少に向かっております。いわば国家の衰退ともいえる事態に歯止めをかけ、動的平衡のかたちをどう画くことができるのか。外国人居住を大幅に認める施策を大胆に進めるのか。交流人口（外国人観光客）を年間4,000～5,000万人呼び込むのか。

東京一極集中による地方消滅に対して、どのような手を打つのか。出生率の増加に導く社会環境をどう築くのかなど、日本民族消滅に歯止めをかける動的平衡について、21世紀前半、この50年間で大胆な国家的施策が求められている事態です。

図２　総人口、人口増加率の現状及び将来推計（1947年～2065年）



資料：国立社会保障・人口問題研究所

日本の人口動態

人口ピラミッド（1965～2065）

①1965年　皿（0～14）に載ったピラミッド型

98,273千人	0～14才	25,166千人
	15～64才	66,928千人
	65才～	6,181千人

②2015年　尻すぼみの基底人口、分厚い生産年齢人口、その上にピラミッドの老齢人口

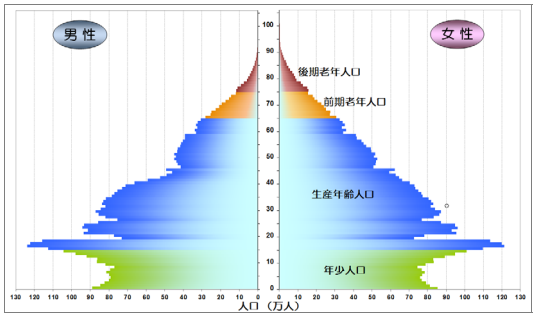
127,095千人	0～14才	15,887千人
	15～64才	76,289千人
	65才～	33,465千人

③2065年　人口ボリュウム縮小、老齢人口（特に女性）のボリュウム増大

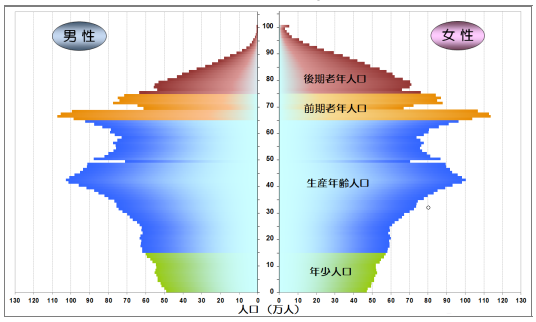
88,077千人	0～14才	8,975千人
	15～64才	45,291千人
	65才～	33,810千人

図３　人口ピラミッド

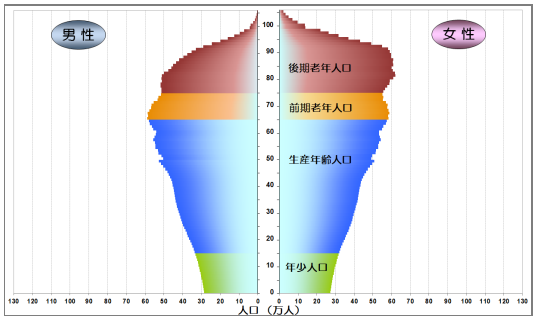
１９６５年



２０１５年



２０６５年

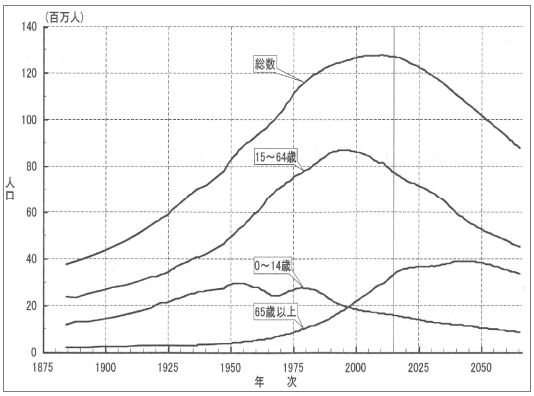


資料：国立社会保障・人口問題研究所

年齢３区分別人口（1884～2065）

・総数　2004年12月をピーク（12,784万人、高齢化率19.6%）に急減少。2065年、0～14才（8,975千人）、15～64才（45,291千人）、65才以上（33,810千人）

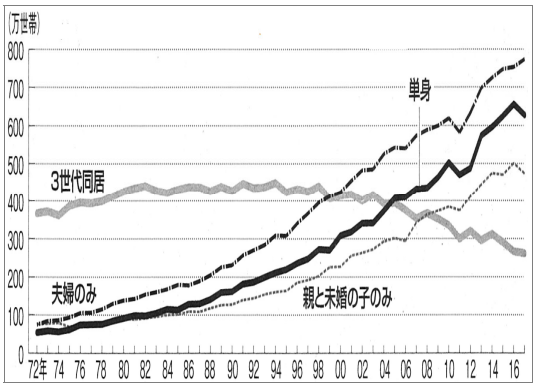
図４　年齢３区分別人口（1884年～2065年）



資料：国立社会保障・人口問題研究所

・65才以上高齢化世帯の推移（1972～2018）
家族型夫婦のみ、単身世帯、親と未婚の子のみ増加

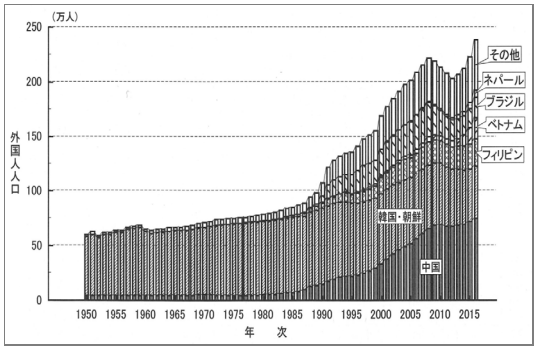
図５　６５歳以上の高齢者世帯数の推移



資料：国立社会保障・人口問題研究所

・国籍別在留外国人人口（1950～2016）
在留外国人は韓国、朝鮮に次いで、中国からの人口急増。その他、アジアから増加が目立つ。北東アジアの人間居住の場が日本を含めて形成されつつあることを示しているのか。

図６　国籍別在留外国人人口（1950～2016年）



資料：国立社会保障・人口問題研究所

動的平衡（『新版動的平衡』福岡伸一より）

「生命、自然、環境―そこで生起する、すべての現象の核心を解くキーワード、それが《動的平衡》（dynamic equilibrium）だと私は思う。間断なく流れながら、精妙なバランスを保つもの。絶え間なく壊すこと以外に、そして常に作り直すこと以外に、損なわれないようにする方法はない。生命は、そのようなあり方とふるまい方を選び取った。それが動的平衡である。」

人口動度（『人口尺度論―居住環境の人間尺度』より）

人口動度（Population Mobility）とは、一定地域、一定社会内での人間の活動量、行動量を示す社会的尺度である。

一人の人間ないし一定の集団の行動の広がり、行動の頻度（時間当りの人口密度）などがこの単位の基底を作り出す。この尺度はまた居住環境内の諸ネットワーク（要素のつながりと働き）ないし要素の機能と強く関連しており、その点でひとまとまりの居住環境の範囲や構造を規定する。

さらにこれを拡大して考えれば、時系列での社会の変化の激しさをもこの物差で量的にとらえることができるかもしれない。

自然と人間と人工を基本要素とする人間の居住環境は、″規模″と″密度″および″動度″といったものでその大局を理解することができるが、その際、諸計画法の軸として″人口″が大きな役割を果たすのである。

人口尺は居住環境の規模をとらえ、問題の枠組みを明らかにし、人口密度と人口動度は人口尺と連動しながら居住環境の質を測定し、新しい設定の目安として働く。

日本列島に営まれる人間居住の文化的基底について

梅原猛さん（93才）、縄文通の哲学者死去

１月12日、日本文化を学際的、総合的に研究する中心機関が必要だとして、国際日本文化センターの設立に尽力し、初代館長をも務められた梅原さんの訃報がありました。

梅原さんとはかつて宮城県のプロジェクトで同席したことがあり、私の顔を見るなり「あなたは縄文人ですね」と云われたことを思い出します。私の生まれは縄文の里、津軽は三内丸山遺跡あたりですがこれを言い当てられた気がしました。

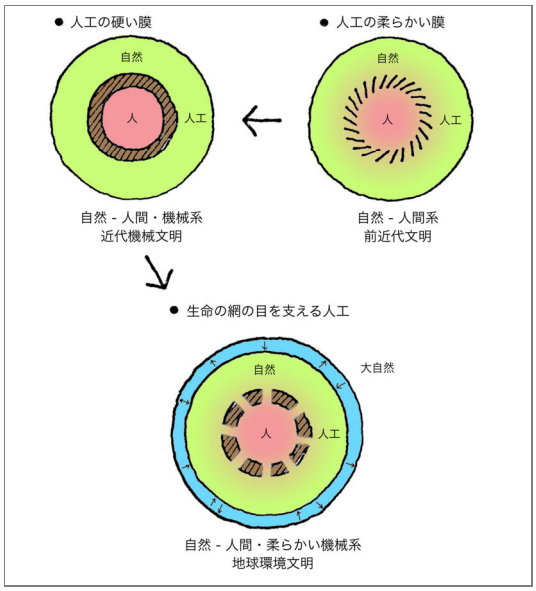
今にして思えば、東北（宮城県仙台市）生まれの梅原さん自身「縄文人」に違いありません。梅原さんの最晩年の著作「人類哲学序説」において、日本のかたちの基底には、人類の原初的文化、狩猟採集の縄文があり、これに重なって弥生、稲作農業にベースを置く日本文化があると説いています。

そして森の思想「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）」にこそ、日本を導く根本があると言い残しております。

21世紀、日本を含む世界の人間居住は、地

球環境問題をはじめ、様々な危機が横たわっており、「人類哲学」を私どもとして深めたいものです。

図７　持続可能な世界へ



注：梅原説に寄せて戸沼作図

日本の物的かたち（国土、都市、地域）のベースをなす日本文化について、作曲家の故**三善晃**さん（1933～2013）が、アーク都市塾において私どもに語ってくれた講義メモが手元にあり、梅原さんの日本文化論に重なる部分もあり書き写してみました。

奇跡的な逆説・日本文化の多様性

日本の社会は宗教によっては合一されず、制度によって整合されている。

一見それは、見事な合一であるかのようにみなされるが、それは逆説ではあるまいか。つまり、日本の文化は、制度的な整合のなかに、世界に類例のない多極性をはらんでいる。しかもその多極性は、全体像であると同時に、私達個々のなかにもある。

和魂洋才と言うが、その前は和魂漢才だった。７世紀初頭の大宝律令による雅楽寮（うたまいのつかさ）（音楽の場合）をはじめ、日本は大陸の文化を制度として受容してきた。しかもそれらは、互いに混交することなく保存継承され、今に至っている。16世紀渡来のキリスト音楽が、長崎の隠れキリシタンによって原型のまま300年温存されたことなどは、世界に類例を見ない。これには日本と日本人のいくつかの属性が関わっているだろう。島国であること、寛容な受容能力、セクショナリズムと家元制度、模倣性と保守性など。そのなかで確かに溶解（風土化）も行われ、音楽ならば今様、平曲、能楽、義太夫、箏曲、歌舞伎などが生まれた。

そして1879（明治12）年、またしても音楽取調掛（現東京芸大）制度による19世紀ヨーロッパ（主としてゲルマン系）音楽の受容。これらすべてのものが、現在の私達の所与であり、それらは私達一人一人のなかに生きている。・・・

「文化発信」という。それは何を発信するのか。私達の文化とはなにか。パリのモードを即時に裁断して着る、その人は一人で、あるいは雑踏のなかで、″今という有る時″、なにを思い、なにを欲し、なにをしようとするのか。私達は制度のなかで規律正しい。「右へならえ」は私達の特技なのかもしれない。多分、モードについてもそうなのだろう。そして、「文化」とか「町起こし」かとかいう合言葉に於いても、私達は社会や集団の構造的規範に異を唱えることを敢えてしない。・・・

しかし、私達の内的世界は（これまた前述のように）おそらく他民族の想像を超えて複雑かつ微妙、多様かつ繊細、混沌かつ緻密なのではあるまいか。それが矛盾したり分裂したりすることなく、一人一人の営みとしても、全体の構図としても、一個の全体像としての均衡を呈しているところにこそ、日本の特質があると思われる。私達に於いては、「一個全体」というものは決して「部分の総和」ではない。この加算できないところに、例えば「間」という概念と実態があった。かつての家屋の「ぬれ縁」は外でも内でもない。大黒柱はやじろべえの原理で造作全体を支えていた。かような、謂わば「不連続の連続」は、私達の文化的文脈のなかでは挙例にいとまない。邦楽の「さわり」と言い、「かかり」と言い、「うつろい」と言うのも、すべてその文脈を織り紡ぐ糸だった。そのような不整合性、非構造性を内に深く湛えたパラダイム（目に見え

ない遠近法）にこそ、私達の固有なエネルギーがあるのではないか。

本音を言う。まずは一人でいたい。一人の「今」を大事にしたい。みんながそうであることからしか「出会い」はない。出会いの背後には言葉以前の言葉、一人一人の欲動が生きていてほしい。

アーク都市塾講演メモより

作曲家・桐朋学園大学学長

三善　晃

平成６年１月28日

私の主催した第２期アーク都市塾「まちづくりの哲学ラボ」は、20世紀末、赤坂・六本木アークヒルズの地下４階で、夕方から勤めを終えた人々を受講生に、大勢の講師を招いて人間居住、都市を論じ合ったものです。

２０１９年正月のスポーツ界

三浦雄一郎氏（86才）、南米アコンカグア（標高6,961m）登頂断念

１月に入って、次男の豪太氏らと南米大陸の最高峰の登頂を目指していた三浦さんは、１月28日、標高6,000mに達した時点で、持病の不整脈が出て、ドクターストップがかかり登頂を断念、下山となりました。プロスキーヤー三浦のアコンカグアからの滑降を期待して見守っておりましたが、本人はさぞ無念だったことでしょう。

その直後のアルゼンチンのテレビ番組で「90才でエベレストに登る」と次の目標を語っており、意欲満々です。「人はどのように老いと向き合い心に力を持って生きていくのか」と「生老病死」に身を持って立ち向かって、個人の気力で突き抜けようとする気迫に共感を覚えます。

大坂なおみ、テニス・全米オープン優勝につづく全豪オープン優勝、アジア初世界女子ランキング第１位に

褐色の日本人、身長180cmの大坂なおみ選手（21才）が難敵を次々に打ち負かし、１月26日、決勝戦ペトラ・クビトバ選手（チェコ、28才）を、7-6、5-7、6-4の接戦で、勝利を手中にしました。この最終戦は、どちらに転んでもおかしくない展開となり、緊迫した場面が続きましたが、有能なコーチ、スタッフの見守る中、決定打を放った大坂選手の精神的強さが、LIVEのテレビ画面にも表れておりました。クビトバ選手は２年前、強盗被害に遭い重傷を負う悲劇に見舞われ、利き腕の左手を傷つけられての決勝とか。彼女にも最後まで勝負を捨てない精神的強さが漲っており、決勝戦にふさわしい名勝負でした。

大坂なおみ選手は中米ハイチ出身の父と日本人の母との間の大阪生まれの日本人。21世紀、多様なキャリアの「日本人」が国際舞台で活躍する姿の前触れと受け取れます。

今やスポーツの世界では国の枠を越えて国際試合が当たり前となっている感があります。

写真１　全豪オープンテニス
女子シングル決勝戦

ペトラ・クビトバ（左）と大坂なおみ（右）

資料：朝日新聞デジタル版（2019/01/26）

平成最後となる大相撲初場所（2019年１月13～27日）

初場所、東京・両国国技館での大相撲の優

勝は、玉鷲（モンゴル、34才）でした。期待の日本人横綱、稀勢の里（32才）が初日から３連敗となり、４日目に現役引退を表明しました。一人横綱となった白鵬も、後半には４連敗を喫し休場となり、関脇玉鷲13勝２敗で、見事初めて天皇賜杯を手にしました。先場所優勝の新関脇、貴景勝は最後まで優勝に絡んでおりましたが、11勝４敗におわりました。

写真２　初場所 玉鷲 初優勝を決めた一戦

注：関脇玉鷲の対戦相手は前頭遠藤

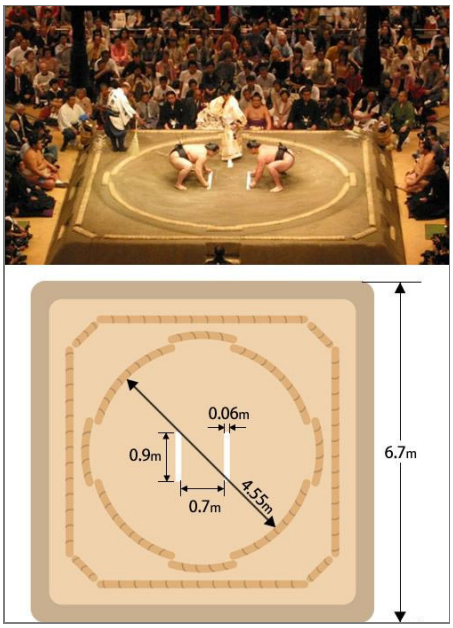
資料：朝日新聞デジタル版（2019/01/28）

この二場所、国技と言われている大相撲にも新旧交代の波が押し寄せているのが感じられます。近年の日本の大相撲は、モンゴル勢が横綱を張り、土俵を引っ張ってきました。そこに久々、日本人横綱、稀勢の里の誕生があり、2017年春場所において、白鵬との優勝決定戦で劇的な逆転優勝を果たし、日本贔屓は大いに盛り上がったことでした。しかし今場所、稀勢の里は力尽きて「土俵人生に一片の悔いなし」として引退となりました。

日本の大相撲はスポーツという以上に、その舞台設定からして日本文化を端的に表しています。

二人の裸の力士の闘いの場は、直径15尺（4.55m）の円の内で、先に土をつけられるか、この円の外に出されるかによって勝負が決まります。15尺の土俵の東西南北の４ヶ所の「徳俵」が俵一つ分の張りが設けられ、これが微妙に勝負に影響を与えます。

図８　土俵のサイズ



資料:「サイズ.com」

(https://www.sizekensaku.com/sports/sumo.html)

至極単純な15尺の円の設定による相撲力士の闘いには、驚くほど多彩な技があるのです。

相撲は、方形の紙一枚で鶴など実に多様な造形をする「折り紙」に通じる、日本文化の特徴があります。

2019年（己亥）は平成年号最後の年になります。

４月新元号、５月皇位継承、10月消費税10%になど、時代の転換期となる行事が予定されています。

また危機対応能力を高め、自然災害への備えなど、私の専門分野–都市・地域・国土計画においても課題の多い年です。今年の干支は「己亥」（つちのとい）。「己」は田園の湿

った土を表し、「亥」は勇気や冒険という意味であり、「己亥」は時をかけてじっくりと物事に向き合える、芯の強さを持っている干支だということです。

新年の様々な難事を乗り越えて、芯の強さのある21世紀の日本のかたちづくりを目指して進みたいものです。

参考文献

1）『習近平の大問題』丹羽宇一郎、東洋経済新報社、2018.12.27

2）『新版動的平衡』福岡伸一、小学館新書、2017.6.5

3）『人間尺度論』戸沼幸市、彰国社、1978.4.10

4）『人口尺度論-居住環境の人間尺度』戸沼幸市、彰国社、1980.12.20

5）『まちづくりの哲学』戸沼幸市編著、彰国社、1991.12.20

6）『「生命の網目都市」をつくる-その哲学と手法』戸沼幸市編著、彰国社、1995.11.10

7）『人類哲学序説』梅原猛、岩波新書・岩波書店、2013.4.19

(2019/01/31)